Fukushima National College of Technology

カントの卒業論文における独立宣言

The Declaration of Independence in Kant's Graduation Thesis

(平成15年9月受理)

笠井　哲* (KASAI Akira)

Abstract

The purpose of this paper is to consider the feature of methodology of the search for truth in Kant's graduation thesis. I hope to make clear the significance of the declaration of independence as the scholar in his thesis.

Kant looked at the moderate proposition against the dispute among the scholars, tried to find the truth in the moderate course. Kant based the search for truth upon the freedom of human understanding in his starting point of study. As a result, the academic freedom was secured. It was not obey the authority and tradition blindly.

Kant synthesized two different assertions and tried to find the moderate course. The critical method is an extension of this moderate method. It follows from this that the beginning of Kant's critical mind existed in this declaration of independence.

1. はじめに

カントが1746年にケーニヒスベルク大学に提出した卒業論文は、『活力の真の測定についての考想、およびこの論争においてライプニッツ氏ならびに他の力学者たちが用いた証明の評価、それらに先立ち、物体の力一般に関する二、三の考察を付す』(以下『活力測定考』と略す) というものであった[1]。これは、当時の学界で焦点となっていた「活力論争」に対して、その決着を試みたものである。

本稿の目的は、この処女作を通して、カントが学問への出発に当たって表明している基本的な姿勢、すなわち真理探究の方法論の特徴を明らかにして、そこに存在するカントの研究者としての「独立宣言」の意義を明らかにすることである。

2. 活力論争史の概観

『活力測定考』本文の考察に先立って、本書の背景にある活力論争史について概観しておきたい[2]。

1644年にデカルトは、『哲学原理』を著した。彼はこの書で、質量と速度の相乗積 (mv) を力の測度とした。すなわち、これを同書の第2部第36節以下において主張している。それによると、運動の原因は二つある。一つは世界のうちにある一切の運動の普遍的原因と、物質の個々の部分をその時その時に運動させようとする特殊的原因とである。普遍的原因は神である。神は物質を運動と静止とともに創造したのであって、この運動と静止とは、最初に神が与えたままであって、変化しない。物質の個々の部分で、運動は様々に変化しうるが、全宇宙においては一定である。したがって、ある物質部分Aが他の部分Bの二倍の速度で運動する場合、BがAの二倍の質量を有するなら、AにもBにおけると同じだけの運動があるというのである。

力の測度を mv とするデカルトの見解に、反対したのがライプニッツであった。彼は1686年3月、アクタ・エルディトールム (ライプチヒ学報) に、『神が常に同一の運動量を保存すると説くために、力学においても濫用されている自然法則に関して、デカルトその他の人々が犯した顕著な誤謬の簡単な証明』と題する小論文を発表し

* 福島工業高等専門学校　一般教科 (社会)　(いわき市平上荒川字長尾30)

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

た。この論文において、ライプニッツは、力の量の真の測度は質量と上昇の高さとの相乗積、つまり質量と速度の自乗との相乗積 mv^2 であり、これが宇宙において常に不変に維持されると主張した。

ライプニッツは、1690 年および 91 年にも、同じくアクタ・エルディトールム誌上で、この問題を取り上げ、デカルト派の反論に対して自己の新しい測定方式のために論じた。さらに 1695 年 4 月に、やはりアクタ・エルディトールムに一論文をのせて、活力と死力という概念を導入した。すなわち、『物体の力およびその相互作用に関する感嘆すべき自然法則を解明し、その原因に遡及するための力学試論』と題する論文である。

それによると、傾向には二種類ある。一つは基本的なあるいは無限に小なるもので、また動因とも呼ばれる。他は前者の継続、または反復から生ずるもので、衝撃そのものである。ただし、これらの数学的存在は抽象で、自然のうちに実際に存するものではない。傾向に二種類があるのにしたがって、力にも二種類ある。すなわち、一つは基本的な力で、死力と呼ばれる。それには現実の運動はまだ存在せず、ただ運動への欲求があるだけだからである。このような死力は卓上にあって、卓を押している物体、投石機からまだ放たれていない石、押し付けられてへこみ、もとの形に戻ろうとしている弾性体などの場合にも見られる。

これに対して、現実運動に結びついた力、それが活力である。活力は死力の無限の連続的な衝撃から生まれる。したがって、死力より無限にまさる。死力には質量と測度の相乗積による算定があてはまるが、活力は質量と測度の自乗との相乗積によって算定される。力が測度の一乗に比例して算定されるべきか、自乗に比例して算定されるべきかは、多くの学者が両派に分かれての大論争となった。そこに形而上学的立場や見解が持ち込まれたために、問題はいたずらに煩瑣となって、一層混乱した。これが「活力論争」であって、当時のヨーロッパの幾何学者間に存する最大の分裂という状況を呈した。

こうした活力論争に、カントも参戦して、両派の見解に解決を与えようとした。しかし、すでに 1743 年にダランベールが『力学論』の中で、「有名な活力の問題」について述べて、真の解決を与えていることをカントは知なかった。mv と mv^2（正確には $1/2mv^2$）は、いずれか一つが正しいのではなく、両者は運動体の作用能力を測定する全く異なる仕方として、いずれも正しいのである。ダランベールがこの論争を、「全く不毛の形而上学的論議」とし、「言葉の争い」となす所以である。すなわち、一つは運動量、他は活力または仕事の量の測度である。

当時はまだ「力」という術語は厳密な規定を欠いており、力の多義性が論争の真の原因をなしていた。論者たちの誤りは、自派の方式が真の本来の力を測定しうると信じていたことにあった。両派いずれも、自分たちの主張する測定方式によっては、実は単に特定の作用量が測定されるに過ぎないことに気づかなかった。この作用が物体の直線運動において存する場合、運動を生み出す原因を運動力と呼ぶならば、この運動力は運動体の運動量、すなわち mv によって測られる。

これに反し、力を運動体の仕事を行う能力と解すれば、それは mv^2（$1/2mv^2$）で測られる。デカルト派もライプニッツ派も、二つの量がそれぞれの見方に応じて正しいことを認めず、一方のみが正しいとした。そのため、自派の立場を正当づける事実を引いてくるが、相手方の立場にとって有利な事実に対しては無理な証明をせざるをえず、誤りに陥らざるをえなかった。しかし、両派とも事実に依拠して自派の正当性を主張したので、論争は激しく続けられたという。

カントの試みた解決はいずれか一方に加担することなく、両派ともに認めようとするところにあり、その限り彼はダランベールと同じく正しい解決方向をとったともいいうる。けれどもカントの誤りは、その場合にダランベールのように $1/2mv^2$ を確立せずに、mv^2 をそのままに認めているというような些細な点にあるのではない。彼は mv^2 があてはまらぬ場合にあてはまるとし、あてはまる場合にあてはまらないとするなど誤った議論を展開している。その点で、自然科学の論文としては失敗作であった。しかし、カントが対立する二つの見方のどちらかに与するのではなく、それぞれにある観点から正しさを認めながら、また両者の誤った点をも指摘しつつ、論争に決着をつけるという基本的態度をとっていることは注目に値する。坂部氏のいうように、

> 相対立する二つの主張の批判的調停というこのゆき方は、のちに見る『純粋理性批判』で有名な「二律背反」についての論にいたるまで、一貫してもたれる基本的な思考方法にほかならない[(3)]。

からである。

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

3. 独立宣言

さて、『活力測定考』の緒言の冒頭には、セネカの『幸福な生活について』第一章からの引用句が、次のように掲げられている。

何より大切なことは、家畜のように先を行く群れに従い、行くべきところにではなく、行かされるところについていくことをしないことである[4]。

この意味は、カントが単に従来の学説に追随するのではなく、行くべきところに行こうとする自分自身の学問に対する毅然たる態度、つまり学問的自由の表明であると考えられる。

それでは、カントは学問の自由をどのように考え、何を真理探究の基準と考えているのであろうか。この問題に対して、自ら次のように答えている。

本書を公刊するにあたり、私は大方の人々の判断を信頼するものであるから、あえて先哲の意見に反する所見をその中で述べても、けしからぬ事と咎め立てをこうむる恐れはあるまいかと考えている。かつて、かかる企てを恐れ憚るような時代もあった。しかし、私の信ずるところでは、そのような時代は昔語りになり、ありがたいことに人間悟性はすでに無知と驚嘆に由来する桎梏を解き放ってくれた。幸いに今はニュートンやライプニッツのごとき人の盛名も、もしその盛名が真理の発見にかえって妨げになるものであれば、あえて無視しても差し支えなく、また悟性の赴くところでなければ、どのような言説にも聴従しなくてかまわないという時代である[5]。

ここからカントの学問の自由とは、「真理の発見」のためには何者に対しても、ニュートンやライプニッツのような権威ある先哲に対してすら反対しうる自由であり、その基準は「人間悟性」以外の何ものでもない。ここに権威や伝統ではなく、「人間悟性」を真理の規準とする近代精神の表現をみることができる

カントは明らかにここで、当代が新しい啓蒙の時代だという認識に立っている。いい換えれば、いわゆる偉大な人々の意見に反することを述べると、何によらず咎め立てを受けたり、身に危険がふりかかってくるかも知れないような古い時代は過ぎ去った。人間悟性は、自ら招いたそういう桎梏から脱却して、新しい自由な啓蒙の時代に入っているのだ、という認識に立っている。これは、いうまでもなくフリートリヒ２世の時代に対する、カントの積極的評価を示している。

そこで、本書は世間の判断に委ねるとして、ニュートンやライプニッツのような偉大な人々の説であっても、真理の発見に反すると思われる場合は、あえてこれを無視して、自分の意見を述べることも許されるであろうし、また真理探究者としては当然そうすべきであるという確信とともに、本書においては実際にそうしたいという、彼自身の立場ないし姿勢をまず明示しようとしている。それで彼は、本書におけるこうした姿勢を端的に示すために、セネカの詩句を冒頭に掲げたのである。したがってこの書き出しの部分には、確かに若い学徒の清新な意気と、真理探究者としての自主的な姿勢がよく現れているといえる。

真理探究者としてのこうした自主的姿勢を、カントは学生時代に、主としてクヌッツェンより学び取った。それと同時に注意しておきたいのは、研究者としての自分のそうした自主的姿勢を端的に表現するために、カントがここでセネカの詩句を挙げていることである。このセネカは、他の多くのラテン作家たちと同様に、カントがすでにフリートリヒ学院時代以来、慣れ親しんでいた詩人哲学者である。したがってカントは、単に研究者としてのみならず、まず人間としてセネカがうたっている自主的・自立的な生き方の重要な意味を、学院時代にすでに十分に感じとっていたのである。そうした意味においては、カントの後年に目立った自主的独立的な人格とエートスは、彼の少年時代ともいえるこの学院時代に、ローマ古典文学の熱心な学習を通して、ある程度形成されていたといえる。

さて、カントは学問にあっては、先哲の意見に対する意見はたとえ斥けられることはあっても、意見の意図そのものまでも斥けられることはない。先哲の意見が自由の所産であるように、その意見に対する意見も、それがたとい非難であろうと自由であるとする。

偉大な人々が人間悟性の自由のために非常な努力をなした後を受けて、我々後人がその自由の賜物を享受して何の差し支えがあろうか。それは、彼らが先人の不興を招きはすまいかと気遣ういわれは、毛頭ないであろう[6]。

ところで、人間悟性の自由は、つまりは私の悟性の自由にほかならない。

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

私は本書の議論を進めて行くうちに、たといどんなに高名なる学者の所見であっても、これを忌憚なく非難することをためらわないであろう[7]。

この私の悟性を真理の基準とする場合、カントは考慮すべき問題点として二つの点をあげながらも、それを積極的に乗り切ろうとする。一つは自己に対する「自惚れ」である、もう一つは他人から受ける「非礼の誹り」である。自惚れが人間の心を支配している限り、偏見もまた存続して決して消えることはないであろう。しかし自惚れを警戒するあまり、悟性の自己信頼としての「確信」を持ちえないとすれば、真理への道を自ら絶つものであろう。当時のカントは、人間悟性の能力について、次のような見解を持っている。

人間の悟性はきわめて完全なものであっても、人体の構造に見られるような均勢と相似とを有するものではない。人体にあっては、肢体いずれか一つの大きさから全体の大きさを推察することができる。しかし悟性の能力においては、事情は全く異なる。学問というものは不規則体であって、均衡も相似もない。学問上では一倭小人に過ぎぬもので、学問の全範囲にわたっておのれに遥かに優る大家の認識を二、三の点で凌ぐというのは一再に止まらない[8]。

このような意味でカントは、人知の最大の巨匠が得ようとしても無益な努力に終わった真理が、私の悟性によってはじめて明示される場合もありうると考える。ここから悟性に対する確信と自らの進もうとする真理への道が、次のように言明される。

自己の力にある種の高貴な信頼を寄せることは、必ずしも無用のことではないということは、私のひそかに信ずるところである。この種の自信があれば、我々の努力もおのずから活気づき、張りが出てくる。真理の探究にはこのようなことはきわめて有益である。もし人が自分の考察に幾分かの信をおき、ライプニッツのような碩学に対してもその誤りを指摘しうることに確信を抱き、この点に自信満々であれば、進んで、この確信を真ならしめるために努力を惜しまないであろう。事を企ててさまようこと千回におよぶならば、この経験こそかえってまた真理の認識に利益を生ずるものであって、その利益は坦々たる大道のみを進んだ場合に比べて、遥かに優るものなのである。

私は、この確信の上に立つものである。進もうとする道は、すでに予示されている。私はこの道を行き、如何なることがあっても、行く手を阻むことはさせないつもりである[9]。

ここには学問に対する「私の悟性」への確信とその意義が高い調子で宣言され、カントの激しいほどの真理への情熱がみなぎっている。カントは「疑惑の状態」からでなく「確信の状態」から出発しようとするのである。浜田氏は、

これはまぎれもなく、自分の悟性の力を確信して単身真理探究に乗りだすものの、逞しい自由と独立の表明であり、満々たる自信の表現である[10]。

として、青年カントの研究者としての「独立宣言」と見なしている。筆者もこれに倣って、カントの「独立宣言」と呼ぶことにしたい。ここでいう「独立」とは、「完成」ではない。真の研究者としての人生の第一歩に過ぎず、すべてはここから始まる。カントの独立宣言は、ひたすら真理を目指して、それにより真理から招かれ支えられる人間の自由を独立の歩が持つ無限の勇気と喜びを示しているといえる。

このようなカントの悟性への信頼と独立自由の気概は、ジョン・ロックの『人間悟性論』冒頭の「読者への手紙」における次のような言葉を、思い起こさせる。

悟性は霊魂の最も高尚な機能であるだけに、悟性を働かすことは他のどの機能にもまして喜びは大きく、永続すると承知しない者は、本書の主題である悟性をよくご存じないのです。悟性の真理探究は一種の鷹狩り・遊猟で、追求そのものが楽しみの大きな部分をなします。真知を目指して心の進む一歩一歩が何かを発見し、その発見は新しいだけでなく、少なくともその当座は最上のものでもあります[11]。

次に、もう一つの問題点、世人がカントを非礼であるとする点について、彼は次のように釈明する。認識の大家といえども人間である限り、「大家その人の誤りというよりはむしろ人間性一般の誤り」がある。またお世辞は、かえって礼を失する。さらには非礼に気をかけ過ぎると言葉遣いに気をとられ、哲学的考察の道を踏み外すことになりかねない。カントにとっては、認識の大家に対してさえ、あくまで真理を基準として「私の悟性の自由」を堅持することが、むしろ礼儀を尽くすことである。したがって、真理の判断については、次のように断言している。

私は真理を認めるのに、遠回しな言い方はせずにおきたい。ある命題が私の考えに従えば誤謬であり虚偽で

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

あると思われるならば、私はこれを全く誤謬であり虚偽であると論断してはばからないつもりである[12]。

要するに、「私の悟性の自由」とは、自惚れを自戒しつつも自己確信を持つことであり、先哲に対してさえあくまで自らの悟性に率直であり、真理に忠実であることを意味する。そして「人間悟性の自由」とは、権威や伝統に盲従したり屈従したりしないで、私の悟性に高貴な信頼を寄せることである。それは自己確信と知的誠実から成り立っている。そして「真理の基準」は、人間悟性つまり「私の悟性」に帰着する。

ところが他方カントは、これらに対応して二つの面を考えている。すなわち「人間悟性の限界」の自覚と「先哲に対する尊敬の念」の裏付けである。これは十分に注目に値する点である。カントの悟性への信頼は、自分の諸命題の正当性について全くの確信をおき、誤りを犯すというような懸念はないという態度を意味するものでは決してない。

したがって、自惚れや偏見は厳重に警戒されている。元来カントは、基本的には「人間性一般の誤り」を前提としている。そしてこの人間性一般の誤りがむしろ、先哲に対する後進の「私の悟性の自由」が存立しうる余地となっている。ただし若きカントにとって、ここで問題となっているのは、人間性一般の限界そのものではなく、誤謬を恐れるあまり「人間悟性の自由」を失うことである。というのは、

> 人間の悟性が、いつの世にも免れ難い数多くの誤りを犯した後をうけて、今や少々の間違いをやったところで、別に恥になるものでもないからである[13]。

つまりカントは、真理発見のためにはニュートンやライプニッツのような人でも、妨げになれば非難しようとも少しもはばかることはないとして、向かうところ敵なしという気概をみせる。まさに、研究者としての「独立宣言」がここにある。しかし、そのために先哲への礼を失しているのではないことを、カント自身、次のように言明している。

> 私はこの序言を機会に、認識の大家に対して私が恭敬と尊敬の念を持することを公然と表明したいと思う。この念を私は、今光栄にも我が論敵と称しようとするこれらの大家に、いつも変わらず抱き続けるつもりであり、私が不遜にもあえて卑見を呈したところで、それはこの念を少しも傷つけるものではないのである[14]。

学問研究の出発に際して、カントが表明したこの先哲に対する尊敬の念は、学問に対する研究の姿勢として終生変わらないものとなった。

4. 中間命題

さて、我々は続いて、カントの活力論争に対する方法上の特徴を、明らかにしておかなくてはならない。もともと活力論争とは、力の測定をめぐるデカルト派とライプニッツ派の論争であった。それは、デカルトが『哲学原理』において、力の測定方式を質量と測度の相乗積（mv）としたのに対し、ライプニッツが力の測定式は質量と測度の自乗との相乗積（mv^2）であると批判したことに始まる。

この論争は、

> 現在ヨーロッパの幾何学者の間に存する最大の分裂の一つ[15]

と見られるほどの激しいものとなった。カントはこの活力論争に真正面から取り組み、分裂を調停しようと試みる。その際、我々が問題とするのは、これらの二つの学派に対するカントの解決の方法である。カントは、「真理探究の際に常に用いている考え方」について、次のように述べている。

> すなわち、明知の人々が二派に分かれ、しかも両派とも相手の見解を少しも理解していないか、あるいは双方とも相手の見解を理解している場合には、両派に共通するある中間命題に注意を向けることが、真理を啓くのに最適の道なのである[16]。

カントは、学者間の論争に対して「中間命題」に目を向け、真理を「中道」において見出そうとする。つまりカントにとって、真理は中道にある。そして中道において真理をうる方法とは、対立する二つの説に対してそれぞれに妥当領域を設定し限定することによって、対立を調停するものである。

いい換えれば、それぞれの妥当領域を逸脱することは越権であり誤謬であるとし、両者の部分的正当性を調整し総合する方法である。この方法に基づいて、カントは活力論争に対して、具体的に調停を試みようとする。その要旨は、以下の通りである。

まず運動は、大きく二つの種類に分けられる。第一種の運動は、その運動の伝わった物質のうちに含まれ、障

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

壁が生じない限り、無限に持続する性質を持っているものである[17]。

第二種の運動は、外的な力に基づいて、その力が停止すればその作用もそれにつれて直ちに止むものである。例えば第一種の運動は、発射された弾丸および一般に投げられた物体の運動であり、第二種の運動は、手でそっと押した球や、何かの上に乗っている物体の運動である[18]。

したがって、前者はそれ自体不滅の力の内的源泉であって絶えずその作用を発揮しているのに対し、後者は一部は自ら消失し、また推進力が去れば直ちに突如として停止するもの、つまり時間に対する瞬間、線に対する点のようなものである。そこで、第一種の運動に関して、内的な自由運動が「活力」と呼ばれるのに対して、物体そのものに基づかない死圧の力は「死力」と呼ばれる。

ところで数学では、物体に外部から引き起こされて生じた力以外の力を認めない。その力は物体の運動の原因の中に、常に正確にかつ同じ量だけ見出される。しかし、自然の物体は事情が全く別である。自然の物体には、外部からの運動の原因によって、その中に起こされた力を自ら増大させる能力が具わっている[19]。

カントによると、デカルト派は数学的物体を考えた。数学は、その取り扱う物体についての概念をそれ自身を公理によって定義し、それを前提とすべきことを要求する。したがって、自然の物体に必ず見られる性質を排除すると同時に、自然の物体には認められないことも数学の物体では真でありうることも可能である。このように、数学的物体はあくまで自らは力を持たず、外部から引き起こされて生じた力以外には認められないから、その力は、mv による以外にない。

ところが自然物体は、外部の運動原因によらない力を自らのうちに持つから、これについてデカルトの力の測度では測れないことになる。しかし、これを強いて測ろうとしてデカルト派は誤謬に陥った。この自己自身の内的力の測度は、ライプニッツ派の mv^2 が該当する。しかしこのライプニッツ派も、逆にその測度を力学的領域を超えて、数学的領域にまで拡張しようとして誤謬に陥ったのである。

以上が、カントの活力論争に対する見解であって、調停の具体的内容の概要である。どちらか一方に偏らず「中道」を行くというのも、学派に対する「独立宣言」と考えられる。

5. 中道の意義

ここで問題となるのは、この調停の成否ではなく方法上の特徴である。それは対立する二学派に対しそれぞれの妥当領域を画定して、その限界内で両者をともに生かしながら、そのいずれにも偏せず、それらを総合してより高次の「中道」を見出そうとする点にある。カッシーラーも指摘しているように、

> 実際、この処女作の特筆すべきことは、カントが自然哲学の領域に踏み込んだその第一歩が、彼にとって直ちに自然哲学の方法に関する試みとなったことである[20]。

カント自身、

> 一言でいえば、本論文全部が徹頭徹尾この方法の所産であると考えられる[21]。

といい切っている。しかも注目すべきは、この方法が「形而上学的考究」と結びついている点である。自然のうちには、真の測定法が現に見出されるとして、

> ただし、これは条件づきなのであって、人々がこれまで企ててきたようなやり方では見出せず、この種の考察（すなわち数学的考察）に対しては永久に姿を現さぬであろうし、何らかの形而上学的考究とか特別の経験によってしか我々に明らかになりえないのである。したがって、我々はここで事柄それ自体を否定するのではなくして、その認識方法を否定するのである[22]。

事実カントは、この論文の具体的展開に際して、はじめに、

> 私の思うところでは、まず物体の力一般について若干の形而上学的概念を確定しておく方が、私の目的とするところ、すなわち確固たる活力論を作るために有意義であろうから、私はその概念からとりかかることにしよう[23]。

と述べている。そして「物体の力一般について」は、次のように考察を始める。もし感覚の教えることだけをみれば、力とは物体に全く外部から伝えられるもので、その物体が静止しているならば、物体は全く力を持たないと思われるであろう。ライップニッツ以前の学者たちは、ただ一人アリストテレスを除いて、すべてこの見解を持っていた。

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

人間の理性がライプニッツに負うところは大であるが、このライプニッツは、物体には本質的な力が内在し、その力はむしろ延長に先立つ物体の属性であると説いた最初の人であった[24]。

このように運動力、作用力、また実体の概念を形而上学的に規定して行くのである。すなわち、

物体の力は、運動力と呼ぶよりは、作用力と呼ぶ方が、はるかに適切である[25]。

と主張する。カントによると、もし物体に運動力のみを認めて、他の力を認めないなら、物体が心におよぼす影響を、いい換えれば、「物質が人間の心のうちに表象を作り出すのは如何にして可能であるか」を説明することが困難になる。しかしこうした両方の困難は、物質の力を単に運動のみに限らず、他の実体におよぼす作用も勘定に入れて、それを「作用力」と見なすならば取り除きうる。そしてこの場合には、

動かされる物質は、自分と空間上つながっているものすべてに、したがって心にも、作用をおよぼすものである[26]。

ということも、また、

心はある一定の場所にあるのだから、外部に対しての物体に作用をおよぼしうるに相違ない[27]。

ということも難無く説明できる。これによって、様々な実体相互の作用が、容易に説明しうる。そこで彼は、次のように述べている。

それゆえに、ある鋭利な思想家が予定調和説を打ち破って、物理的影響の説の勝利を確保しようとする上に、上述のような概念の些細な誤りほど邪魔になったものはなかった。しかも、少し注意を払えばこの誤りは、容易に逃れられるものなのである[28]。

ここでカントがいう「鋭利な思想家」とは、彼の師クヌッツェンのことである。クヌッツェンは、ライプニッツの予定調和説から出発しながら、これでは実体間の相互作用が十分に説明できないとして否定し、ニュートンの物理的影響説によって、その相互作用を、したがってまた心身関係をも説明しようとした。この点については、カントも全く同感であった。しかしカントはその際、クヌッツェンが物理的影響説に立とうとしながら、心の力を表象に、物体の力を運動にしか認めないところに「概念の誤り」があるのに気づいた。この誤りが、実は師の主張する心身関係の物理的影響説に対する障害となる点を、ここで指摘している。

したがって、ここでカントは、尊敬する師の学問の欠陥を指摘し、それを自己の確信に従って補正しようとしているのである。これはカントによると、師に対する非礼をあえてすることではない。むしろ模倣家とならずに、独自の思想家となるように、自ら自主的に思索し、著述することこそ、この師から教えられた真理探究者としてのあるべき姿勢にほかならない。これは、師からの「独立宣言」といえる。

もとよりカントは、師から教えられているからそうしたのではなくて、師の教えに深く共鳴すると同時に、自らもそのような自主的な姿勢を取るところに、探究者としての真のあり方が存すると確信していたから、そうしたのである。このことは、先にも引用した卒業論文の序論において、カントが次のように述べているところからも明らかである。

自己の力にある種の高貴な信頼を寄せることは、必ずしも無用のことではないというのは、私のひそかに信ずるところである。この種の自信があれば、我々の努力も自ずから活気づき、張りが出てくる。真理の探究にはこのようなことはきわめて有益である。もし人が自分の考察に幾分かの信をおき、ライプニッツのような碩学に対してもその誤りを指摘しうることに確信を抱き、この点に自信満々であれば、進んで、この確信を真ならしめるために努力を惜しまないであろう[29]。

ここには、カント自身の真理探究への自信と情熱とともに、これに立脚しようとする彼自身の基本的立場が示されている。彼はまた、同じ序論のはじめとおわり近くで、偉大な人々に反論すれば身に危険がふりかかったり、容赦なく非礼であるといわれるような古い時代は、すでに過ぎ去ったという。現代が、思想・言論の自由な新しい啓蒙の時代であるということを強調した。と同時に、偉大な人々に下す判断だからといって、特に気を使って修飾したり、巧みに和らげた表現をしたりしないという。そんなことをしていると、自分が窮屈な気分に支配されて肝心の「哲学的考察の道を逸脱する」ことになるということを述べていた。これによって、カントは当代を自由なよき時代として積極的に評価する。それともに、自らはどこまでも自由な真理探究者として歩みたいという、彼の自主的・主体的な姿勢が伺われる。これもカントの「独立宣言」である。

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

6. おわりに

以上、カントの卒業論文『活力測定考』における真理探究の姿勢と方法の特徴を考察した。カントが、学問研究の出発にあたって、準拠した真理探究の基準は「人間悟性の自由」であった。これによって、権威や伝統に盲従したり屈従したりしない学問の自由が確保される。それにより、研究者としての「独立宣言」がなされる。ただし「人間悟性」の自由が結局は、「私の悟性」への高貴なる信頼に帰せられる限り、私のみならず人間の悟性一般の限界というものが、当然自覚されなければならない。

そのためにカントは、学問追究の姿勢として自惚れを慎むこと、同時に先哲への尊敬を持ち続けることを言明したのである。また真理探究の方法は、二つの対立する主張に対してそれぞれの領域を画定して、その範囲内においてそれぞれの主張を容認し、同時に一見相容れない二つの異なる主張を総合して、より高次の中道を見出そうとするものであった。

このカントの哲学的方法を、我々は「二律背反的解決法」と特徴づけようと思う。というのは人間の悟性を信頼して、それ以外の何者にも依拠しないにもかかわらず、悟性一般の限界を自覚し、それを前提することによって、対立する二学説のそれぞれの限界を画定し、しかも二つの異説を、より高次の次元で総合しようとするものだからである。さらに、ここに我々は、やがて画期的に結実する批判的精神の素地を看取する。

勿論ここでは、悟性または理性そのものの能力一般の批判が研究対象となっていないから、これを直ちに批判的方法と結びつけることには無理がある。カッシーラーも前掲の、

> 一言で言えば本論分全部がまったくこの方法の所産であると考えることができる[30]。

というカントの文章を引用して、

> カントは、彼の哲学的・物理学的な処女作を「方法に関する論文」と呼んだ。――後に彼は、生活と著作活動の頂上に立ったとき、『純粋理性批判』を同じく方法に関する論文と名づけた。これらはそれぞれ、方法という同じ規定を持ちながら、彼自身にとってはその意味は変化している。そしてこの意味が経験した変化のうちに、彼の哲学とその発展の全体が包括されているのである。
>
> 言うまでもなく、ここではまだカントは、後年の学説が意味する「批判的」考察からは遠く隔たっている。それゆえ、もし人がそれをこの論文中に読み取ろうと欲するならば、それは恣意的となるであろう[31]。

と述べる。そこで我々は、カントの哲学的方法を次のように解する。この卒業論文における「中道的方法」を、彼の批判的方法と直接に結びつけるには無理がある。しかし両者は、決して異質ではなく、先に特徴づけたように「二律背反的解決法」という点で共通性を持っている。この「中道的方法」の延長線上に、「批判的方法」が確立されて行く。その意味でここにすでに、カントの批判的精神の萌芽が十分に看取されうる。

『活力測定考』の最終節には、次のように記されている。

> この両極端を知っていたので、両側から見て真理の落ち着く点を決定するのにも困難はなかった。これを定めるのに鋭利な知性などは、少しも必要ではなかった。ただ党派心がなく、感情傾向がしばらく均衡を保っていさえすれば、困難は容易に除かれたのである[32]。

こうした中道をうるために、堅持された不偏不党の公平さ、公正中立の姿勢はカントの哲学的方法に反映している。と同時に、カントの基本的な研究態度として、一貫して堅持されて行く。したがって、我々はここにカントの批判的精神の原初的素地を見出すのである。

註

（1） Gedanken von der wahren Schätzung der lebendigen Kräfte und Beurtheilung der Beweise, deren sich Herr von Leibniz und andere Mechaniker in dieser Streitsache bedient haben, nebst einigen vorhergehenden Betrachtungen, welche die Kraft der Körper überhaupt betreffen.

引用は、アカデミー版により頁数を記す。邦訳は、理想社版を参照したが、適宜語句を変更した。

（2） 亀井裕「解説」、『カント全集　第一巻　自然哲学論集』理想社所収、1966年、339―343頁参照。

（3） 坂部恵『カント』講談社、1979年、53頁。

（4） a. a. O. S. 7

（5） ebenda

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

(6) a. a. O. S. 8
(7) a. a. O. S. 9
(8) ebenda
(9) a. a. O. S. 1
(10) 浜田義文『若きカントの思想形成』頸草書房、1967年、81頁。
(11) 大槻春彦編『ロック　ヒューム』中央公論社、1980年、65頁。
(12) a. a. O. S. 12
(13) a. a. O. S. 11
(14) a. a. O. S. 13
(15) a. a. O. S. 16
(16) a. a. O. S. 32
(17) Vgl. a. a. O. S. 28
(18) ebenda
(19) Vgl. a. a. O. S. 139－140
(20) E・カッシーラー、門脇卓爾・高橋昭二・浜田義文監修『カントの生涯と学説』みすず書房、1986年、30頁。
(21) a. a. O. S. 94
(22) a. a. O. S. 60
(23) a. a. O. S. 17
(24) ebenda
(25) a. a. O. S. 18
(26) a. a. O. S. 21
(27) a. a. O. S. 20
(28) a. a. O. S. 21
(29) a. a. O. S. 10
(30) a. a. O. S. 94
(31) カッシーラー前掲書、30－31頁。
(32) a. a. O. S. 181

NII-Electronic Library Service